

浄土

1986-8

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 (運輸省 特別授承認雑誌) 第三二五号
昭和六十一年七月二十五日印刷 昭和六十一年八月一日発行
第五十二卷 八月号





八月の秀句

八月の大風南より来る

佐藤 紅緑

口紅の玉虫いろに残暑かな

飯田 蛇笏

旧盆の部屋真ン中に寝たりけり

松本 旭

八月号



但だ眉間の白毫を觀じても、極めて明了ならしめよ。

——『觀無量壽經』真身觀文

目次

法 話

光と希望を……………土佐舜成……(2)

——インド山日本寺——

うらぼん会……………松島定宣……(8)

——父母に孝養の仏事——

小学校と漢字教育……………曾田文雄……(14)

<連載> 一紙小消息 ⑬

輪廻の里を離れる……………村瀬秀雄……(19)

み仏とともに =17=

——貴光寺建立——……………安居香山……(25)

◇◇ 長篇連載小説 ◇◇

立ち止まるな善導 第26回

女の戦争・風含む山陵

……………寺内大吉……(31)

挿絵 松濤 達文

表紙絵「しおで」 松浦春子画

(法)

(話)

光と希望を

—インド山日本寺—



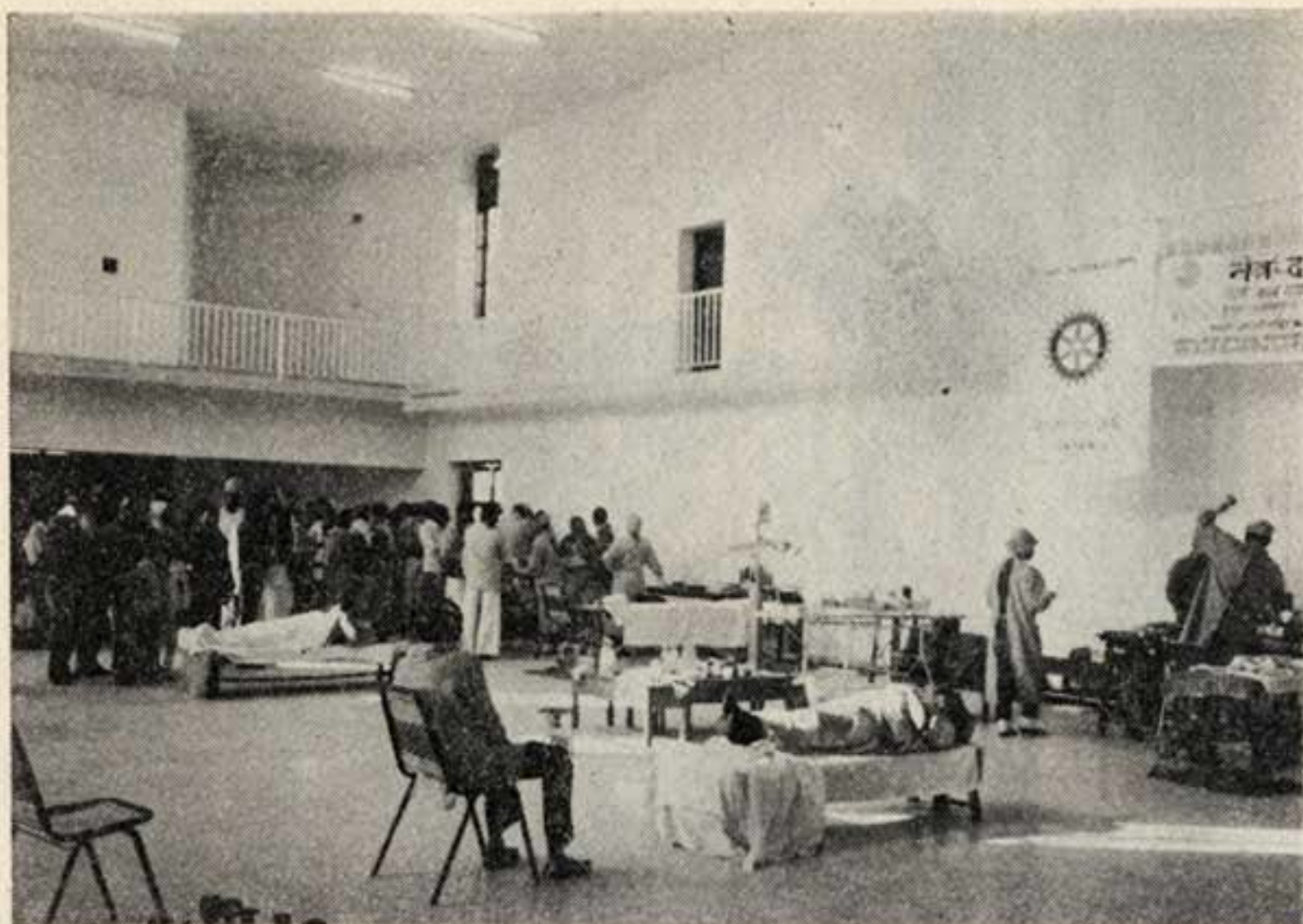
と さ しゅん じょう
土佐舜成

(財)国際仏教興隆協会理事
(神戸市阿弥陀寺住職)

インド・ビハール州ブッダガヤ釈尊成道の
墓地には、大塔周辺に既にビルマ、タイ、ス
リランカ、中国、チベット等の寺院があり、
インドにおける仏教再興のため、又世界中か
らの仏跡巡拝者のためにそれぞれ宿泊施設を
もち便宜をはかっています。

さて、日本仏教徒の仏陀への敬慕の念厚く、

昭和三十八年以来気運熟しその聖地に日本寺
を建立すべく窓口として初代会長に今は亡き
元大蔵大臣賀屋興宣氏、初代理事長に前祐天
寺貫主巖谷勝雄上人のもと、(財)国際仏教興
隆協会を設立、各宗派を超えてのご協力を頂
き文字通り全日本仏教徒の立場にて今日まで
に建設され、その経過は次の通りです。



——講堂における手術——

昭和四十五年二月

国際仏教会館（宿泊設備二十六室も含む）

昭和四十八年十二月

日本寺並びに鐘樓堂落慶

当時十二月一日から十五日まで日本から十五の各宗落慶法要団が渡印。インド国内航空はオール・ストライキで欠航、全て列車に切り換えねばならず、通常は法要前日の夕方到着のところ、その折は深夜、又は当日の朝に到着という状態でした。加えて本堂一切の仏具がカルカッタ港での通関手続き意の如くならず、辛うじて七日の朝にトラック二台でカルカッタから不眠不休にて無事安着というまことに筆舌に尽し難いハプニングがあったことです。

八日には全日本仏教会長 佐藤泰舜猊下、インド大統領 V・V・ギリ閣下じはめ中



——診療するインド人医師——

中央政府、州政府要人、駐印日本公使等ご参
列頂き両国総理のメッセージ、世界仏教史
上画期的な一大慶事でした。

昭和五十二年十二月

菩提樹学園（無料幼稚園）

（社）日本仏教保育協会並びに今は亡き同協
会理事長であった古屋道雄上人のご尽力に
より聖地周辺の電気、ガス、水道も無い恵
まれない家庭の子供達にせめて字の読み書
きできるようにとの思いにて開園しました。
現在は六十人の園児を二年間保育いたし、
給食といえは聞えが良いですが、ビスケッ
ト、お粥等を配り、家では兄弟姉妹が何も
食べてなくて園児帰宅の時間を待っている
とのことで、貧しき中にも何と心の豊かな
ことでしょう。

昭和五十九年十二月

光明施療院（無料医療施設）、講堂

全日本仏教徒婦人代表委員会（会長 大本山善光寺大本願一条智光台下）傘下の各宗尼僧団、仏教（寺庭）婦人各種団体並びに広くご賛同頂きました皆様からの尊い浄財にて建設されたものです。

日本仏教徒婦人が、当時インディラ・ガンジー首相と仏教を通じ、出会いと繋がりに今後の婦人運動の大きな意義のもと、光明皇后さまにちなんで医療施設を完成したものです。落成式には当初ガンジー首相のご臨席をご自身極めてご考慮下さっていたにも拘わらず不慮のご逝去、代ってビハール州知事A・キドワイ閣下ご出席、導師、一条智光台下のもと多数の日印関係者が参列、インド大統領G・Z・シン閣下はじめ全日本仏教会長、日本国首相、厚生大臣の祝辞

も披露され、併せて天台宗長藤葉上照澄大僧正の竺主（住職）の晋山式、同じく新築の講堂には神戸市在住の芝良空氏の謹彫「釈尊降魔尊像」が奉安されました。

なお、落成式後約一カ年諸般の準備、現地での詳細打合せを経て昨年即ち昭和六十年十二月二十日インド人医師、看護婦、薬剤師による診療開始の運びとなりました。

インドでは医師に診察してもらうことのできるのは極く限られた恵まれた人々、一般大衆はまったく無縁のこと。昨今では一日平均二〇〇人から二三〇人の診療希望者が数十キロの道をいとわず、日本寺をめざしてやってきます。

駐在僧は外来者の整理、薬品の補充等に懸命の努力、人手が欲しいとの切なる願い。私も広く日本の若き世代の青年僧に呼びかけていますが、又青年海外協力隊にもお願

いしたい心境です。

なお、特筆すべきことは、国際ロータリー第二六五地区（京都、奈良、滋賀、福井）の七十ロータリークラブ（地区世界社会奉仕委員長、大石恒義氏）並びにアメリカ、イリノイ州エバンストンにある国際ロータリー本部事務局からのご協力にて、桐生市の眼科医、百瀬皓博士以下助手、看護婦七名の医療奉仕チームを編成、本年一月中旬から約半月間現地各所での講演、日本寺の講堂を利用して十日間、文字通り寝食を忘れて恵まれない現地人の白内障患者一七三名を手術、また日本寺インド従業員二人も外傷による目の欠陥を無事回復して頂きました。ブッタガヤの朝晩の冷えこみは予想以上、夕食は毎晩十時頃、看護婦さんはインド従業員の作ったささやかな日本食を二口、三口食べてあとは止めてしまおう。疲れでノド

を通らない、そんな状態でした。

現地人は平均四十～四十五歳位で食糧不足のため白内障になる人が多いわけです。衣食住という生活条件に見放された悪条件にも拘わらずなお生きている患者を一人でも多く救いたいという、まさしく菩薩道というべきでしょうか……。

さて、私達は単に日印友好親善のみならず、仏教の国際的、社会的意義を探究すべきです。イギリスの著名歴史家、アーノルド・トインビー氏の「二十世紀は科学優先の時代であったが、二十一世紀は、まさしく宗教の相互尊重、且つ待望の時代である」と。

このような意味で昭和五十年以来、毎年十二月八、九、十日の日本寺に於ける国際仏教徒結集は、アジア各国はいうまでもなく広く欧米仏宗徒も多数参加、ブッタガヤの聖地か

ら今後の世界仏教の指針が打ち出されることを念願し真摯にテーマごとに討論され、牛歩ながらも実行に移しつつあります。

今、世界は知育偏重、過保護、科学文明に日々迫われて自身を見失っている先進国民よりも、熱帯、砂漠の不毛の地で困苦欠乏に耐えぬいている発展途上国の人々が生命力逞しく育っているというのが西洋の定説であり、西欧人は彼等と同じようにならなければ、自分達の文明は滅んでしまうという不安にかられているのが、現代世界の相であると有識者は訴えています。

私達、日本寺関係者は迂路曲折ながら十五年、三十年先に思いを馳せ、ひたすら仏恩報謝の念にて精進いたします所存です。今後ともなにとぞご指南、ご協力賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

◎ 仏教まんが・教育図書

——多数発行——

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―一六

電話(〇三)二六二―五九四四

振替(東京) 一一八三四七

(法)

(話)

うらばん会

—父母に孝養の仏事—



○孝養父母の仏事

八月のお盆の頃になると、各交通のターミナルは、それぞれ父母のまします故郷・先祖の墳墓の地へと帰りを急ぐ人々で混雑する。幹線道路、高速道路も、帰省を急ぐマイカー

の群で埋まり、車は数珠つなぎになる。その車の中は、子ども達や父母への土産などでいっぱいである。これは、物質中心で心が貧しくなったと言われる現代においても、なお生きている美しいお盆の心のあらわれと、尊いことに思われる。実に、お盆とは孝養父母の仏事なのである。

松島定宣
まつしま じょうせん

思えば、私も子供の頃、お盆は年中で最も嬉しい季節であった。お盆前には、大掃除のほか、家族全員で真鍮製の茶湯器、花瓶、香炉などの仏具を磨き、兄弟でその輝きを競いあった。お墓の花立や線香立を、新に青竹を切って造ったり、境内の生垣を刈りこんだりするのには帰省してきた兄達のつとめであった。遠く膝下をはなれて他郷にあった兄姉が、元氣な姿を見せることが、どんなに父母には喜びであったろうか。親からもらった小遣いの中から、それぞれに買い求めてきたささやかな土産に、苦笑しながらも嬉しさがこみあげたであらう。

小学生の幼い身に、風呂敷に包んだダンゴの粉や母の手縫いの浴衣ゆかたなどを背負わされて、母の名代としてその実家へ、「盆礼」にゆかされたことも、なつかしく思い出される。五キロの道にはかなりの坂道もあり、遠いなあ、

遠いなあと思いながら、背の包みを何回も背負い直しながら歩いた。そして無事に教えられた挨拶もでき、使命を果して帰る時は、身も心も軽く、夏の日盛りなど全く気にならなかった。

お盆の宵には、提灯をそれぞれ手にして全員でお墓に参る。そして、家に帰ってから家族そろって仏前に読経し念仏回向する。お盆の特別の供物は、三角錐に積みあげたおだんごであり、三日間は黄な粉をつけておだんごを頂く。

子供の頃はまったくそれとは意識しなかったが、正にお盆は孝養父母のときであった。今日のように心の荒れた時にこそ、父母、先祖への孝養の誠をはこぶなつかしいお盆の仏事を一層大切にし、盛んにつとめたいものである。

○お盆行事のはじまり

日本では、日本書記第二十六によると、斉明天皇三年（六五七）秋七月の条に、孟蘭盆うらんぼん会が設けられたとある。日本に仏教が伝来された当初から行われてきた仏事である。爾来千三百余年、今に至るまで絶えることなく営まれていることの中に、あらためてこの仏事にこめられている孝養父母の教えの尊さと、人情の根本を培い、親しまれてきた仏事であることを知る。

勿論中国においても盛んに行われたが、その起源は二千五百年前のお釈迦さま（釈尊とよぶ）の時にある。

孟蘭盆経によると、釈尊の大弟子である目連尊者が、修行して悟りをひらき、初めて六神通という力を身につけられた時、先ず父母

を救い、乳哺養育の恩を報ぜんとされた。悟りの智慧の眼をもって世間を観られると、父は天上界に居られたが、母は餓鬼の中に生じて、飲みも食いも出来ず、為に骨と皮だけにやせ衰えて苦しんでおられた。そのさまを見てすぐさま通力をもって母を救わんとされたが、目連尊者一人の力ではどうすることも出来なかった。頼るはみ仏のみと直ちに釈尊の膝下につけつけ、つぶさにその苦しみを訴えられたのである。（人生において、真に依るべき師、教えをもつことの幸せが思われる。）

釈尊は「七月十五日僧自恣じしの時、七世の父母（先祖）及び現在の父母のために、百味の飲食をもつて、十方のもろもろの僧に供養せよ」と教えられた。目連尊者が教えの如くされたところ、その日に母は一切の餓鬼の苦を脱することが出来た。釈尊は更に「出家の僧をはじめ、国王・大臣から庶民に至るまで、慈悲

孝養を行わんとする者は、皆先ず現在の父母、過去七世の父母の為に、七月十五日僧自恣の日において、百味の飲食をもつて十方の僧に施し供養せよ。よくそのように行じらば、現在の父母をして無病長寿ならしめ、又七世の父母をして、餓鬼の苦を離れて人天の中に生れしむることができると教えられたのである。

ここには、父母、先祖を救い安んぜしむることの大切さと、真に父母先祖を救い、安樂ならしめる為には、他の幸せのために尽す布施の尊さが説き示されている。その布施の中でも、自ら菩提（さとり）を求めて修行し、その力を万民の救いにと専心している者に、布施供養することの功德の大なることが教えられている。

その仏道修行の、最も充実した七月十五日僧自恣の日に供養を行えば、必らず父母、祖

先を安んぜしめ、歡喜せしめることができるというのである。現在も綿々として営まれているお盆の仏事の由来はここにある。

○僧自恣とは

さて、この僧自恣とはどういう事であろうか。日頃あまり聞きなれぬ仏語であるので、少しく詳しく述べてみよう。

最古の經典の一つである相應部經典には、次のように物語られている。

それは釈尊が、舍衛城（しゃえいじょう）の郊外、東の鹿子母精舎（ろくしぼく）におられた時のことであつた。修行僧たちは、毎年四月十五日から七月十五日迄の三カ月の間は（インドの）雨期にあたり、この間は外出を止め、ひたすら静坐修行するのである。その夏安居（げあんご）の最後の日、七月十五日の宵に盛大な自恣（じし）の式が行われた。

自恣というのは、三カ月にわたる安居の生活が終り、満員のもと、安居を共にした修行僧たちが集って、おのおの自らすすんで、自己の罪あやまちがあれば、どうか指摘してもらいたいと、仲間の修行僧たちに請うという、単純で美しい儀式である。

先ず釈尊が、修行僧の前に合掌して、自恣の作法をはじめられた。

『比丘たちよ、私は今、自らすすんで請う。なんじら私の行為と言語のうえに、なんぞ非難すべきものあらば、指摘してもらいたい』みんな黙っていた。舍利弗尊者が坐より立って言った。

『世尊よ、誰も世尊の上に非難すべき点を見出したものはございません』――

（何と釈尊自ら弟子達の前に合掌して、わがあやまちを指摘ほしいと請うておられる。身のひきしまる感動と、修行の厳しさを覚えずにはおれない。）

そして今度は、第一の弟子舍利弗尊者の番である。釈尊と同じように尊者もまた、自恣の言葉を表白した。誰もその過誤を指摘する者はなかった。釈尊が立って、舍利弗尊者の潔白に讃辞をおくられた。

そのようにして、五百人の修行僧が、交るがわる自恣をいとなんだが、唯一人として非難をうけねばならぬ者はなかった。（満月のもと、まことに肅然とした美しい光景が想いえがかれる。何という尊いことか!!）

その時、婆耆沙^{ばしや}という詩をよくする修行僧が、感にうたれた面持で、釈尊の許しをえて、次のような偈（詩）をととなえた。

今宵十五夜、身口意のきよめのため、いまここに五百の比丘たちつどえり。すべて煩惱のまどわしを断ちつくし、また迷いの生を繰返さざる聖者なり。かれらみな世尊の子、法の嗣子にて、

ここに無用の弁をもちゆるものなし。
いま、渴愛^{かつあい}の箭^やを抜きさりたるもの、
ここに仏陀なる世尊を敬礼したてまつる

○念仏して孝養につとめん

このようなみ仏やそのお弟子達には、心からの敬いの心をもって供養せずにはおれなくなる。(そのような僧でありたい、信者とならねばならぬと思う。)その供養は功德絶大である。何とならば、「福のみのる田」とたとえられる仏の教団に施すことにより、いよいよ人々の心に灯をともし、明るく力強く生きる力を与えたもうからである。その功德は、父母、祖先に及ぶだけではなく、このような無上の善事にはげむ子孫をみることは、また父母祖先の真に歡喜するところである。

このみ仏や聖弟子に供養する教えを、現代

に生かしうけとると、生きませる父母や亡き先祖への孝養を尽くすと共に、有縁の菩提寺や有縁のお坊さまに供養の誠を運び、さらには常に世の人々の為に昼力している施設、団体、人々に布施して行くことこそ大切であると教えである。

釈尊も、法然上人も、そして聖光、良忠、源智の三上人も、みな父母を想うこと篤く、孝養の志の深い方々であったことを改めて想うのである。

法然上人は「孝養の心をもって、父母を重くし思わん人は、まず阿弥陀仏^{あみだぶつ}にあずけまいらすべし」と、先ず念仏を申せと勧めたもうている。孝養父母の仏事たるお盆にあたり、心してお念仏にはげみつつ、父母、先祖にかえ、さらにつとめて、布施、供養に心がけたいと思う。

小学校の漢字教育

曾^そ田^だ文^{ふみ}雄^を



一

わたくし達は、自分の思っていること、心の中にあることを他人に知って貰おうとする時、場面の如何では身ぶりでもて伝えたりすることもありましようが、まずは「ことば」を使ってするのが普通です。

その「ことば」には二種類があつて、一つは音声を以てする「話しことば」と、いま一つは記号を用いて行ふ「書きことば」との二つに分けられます。そして、これら二つのうち、後者の「書きことば」における記号とい

うのは、一般には「文字」を指します。

このようなことならば、皆様は、先刻御承知ずみのこととごさいましよう。

さて、その「文字」でありますが、わが国で用いられる文字は、漢字・仮名が主体をなしております。而して、その漢字について申すなら、これは、中国の清時代に作られた『康熙字典』によれば、その数四万八千六百字余りが載せられている、ということとす。こんなにおびただしい数の漢字を全部頭にしまい込んでゐる人など、まずは存在しないに違いありませんが、多く知ることがそのまま知識

の多さに比例すると考える人もあり、為に随分苦勞した時代もあったようです。

このように、漢字を多く知ろう覚えようとするならば、それに振り廻されてしまい、他に投入すべき貴重な時間が無駄になるのではなからうか、と心配した揚句、採用されたのが漢字制限という制度でありました。その結果生れたのが当用漢字あるいは常用漢字と呼ばれるものであります。今日見る通り、新聞、雑誌は右の制約を守っており、紙面で用いられる漢字数は、およそ二千字程度におさえられております。

二

漢字は、小学校一年から学ぶのであります。六年間に一定数の漢字が覚えられるようにと、各学年毎に習うべき漢字が決められています。常用漢字のうち、各学年毎に学習する、これが教育漢字と呼ばれるものです。その数は九百九十六字と定められており

ます。

そもそも漢字なるものは、仏教と無縁では決してありません。大乘經卷が中国大陆から伝来したということもあって、すべては漢字、漢文で記されたのが本来の姿でありました。

これに、かの漢字制限を課して、常用漢字の枠内で記すとなると、それは全く不可能でしかありません。仏教の立場だけからしていえば、漢字はできるだけ沢山覚えるに越したことはないわけであります。

ということ、かかる仏教とは切っても切り離せない漢字については、幾文字用いるのがふさわしいやら、誰方が興味を御持ちの方があれば、よろしく適当に決定してください、ということではすまされません。

仏教の立場を離れてもなお、この字は学校で教わりませんでしたから読めません、また覚えようとも思いません、で学童が成長していくのを傍観するだけ、という態度も決して許されることではない、と考えます。覚えら

れることなら、できる限り覚えるのが最良であることに相違ありません。

しかるに、右に述べました教育漢字に関しては、これを各学年に配当して記憶させる上で、漢字学習の流れの面から眺めたとき、あるいは勿体ない、乃至はわけのわからない矛盾が幾つか出てまいります。

右の問題について、お話してみたいと考えます。

三

教育漢字には、一つ一つの漢字について、この字は何年生になった時教える、という制約が設けられております。

けれども、御存知の通り、漢字には、扁・旁り・冠などの如く、幾つかの要素から組立てられているという仕組みがありまして、漢字によっては、同一の要素を含んだものが相当数あります。

ですから、例えば「里」という字を二年で

習うなら、この字形を含む「野」という字も二年で習わせる、「頭」と「顔」、あるいは「鳥」と「鳴」など、共にそれぞれは二年で学ぶべく配当されております。

左様な配慮が加えられている点は、よく汲み取れるところではありますが、しかしまだまだ十分とまではいかないように思います。例示しながら説明いたしませう。

「口」は一年の時習い、「不」は四年生で習う。ところが、これら二つを組合わせた「否」という漢字は六年が来るまで教えられない。まさか、この「否」を四年生や五年生が答案などで使ったら、誤りにされ、叱られるのようないことはありますまいけれども、如何にも勿体ない教え方のように考えられます。

似た例として、「動」と「働」が挙げられます。「イ」（にんべん）のことは、一年時で「休」が出で、二年になると「作」「体」が出ます。したがって、三年次で「働」が書けるように教える際、引続いて「働」をも教え

てしまえば、「動」字の記憶上からも好都合か、と思われるのに、この「働」は更に一年おいた四年次で、と隔てられています。

「象」と「像」についても同じこと、前者は四年、後者は五年と決められているのです。

かような類には「競」があります。見ての通り、この文字は「立」と「兄」との組合せから成るものです。その場合、「立」は一年で学び、「兄」は三年で学ぶ文字です。でありますから、この二文字が分っており、読んで書ける生徒に向つては、「競」を教えるでもさ程苦勞は伴わないように思えるのですが、四年生になるまで教えて貰えません。体育の時間や運動会その他で「競走」ということは良く用いられるのではないのでしょうか。どうして早く教えてしまわないのでしょうか。

「口」は先述の通り一年で習う文字。にもかかわらず、これを三つ組合わせた「品」と三年まで習うことはありません。関連して

申すなら、「学」は一年で出て来る漢字です。「子」も一年で習うのですから、「学」が「学」の部分と「子」の部分とに分析できることは理解できる筈です。ならば、一工夫さえすれば「営」あたりも一年次で教えてしまえるように思います。そこまででなくても「宮」ならば「営」より二年前、三年次の文字です。せめて両字を同学年内にまとめたいところ。

「景」も同様に考えることが可能です。「日」は一年、「京」は二年で学びます。それに対して「景」は四年生で初めて、という具合。

「浴」と「容」の場合は如何。「氺」（さんずい）については、「池」「海」が二年で出ますから、その折習得します。一方「宀」（うかんむり）は「室」「家」が二年で、「宮」は前述のように三年で出て来ます。だから、「浴」は「谷」を二年で学ぶ際に教えたらいし、「容」も同じようにしたらよい。それなのに、

「浴」は四年次、「容」に至っては五年次を待たないことには教わりません。

以上の如く揚げると、無茶苦茶な配当、とお感じになるかも知れませんが、弁護すべき例も存します。一年で教えた「木」「目」を元にして、四年次で「相」を教える、そのついでに「想」も教える、といった配慮も一方では行われています。

他にもまだ、「点」(二年)「昭」(三年)に対する「照」(四年)などの例も拾えますが、こちらで止めましょう。

四

それよりも、もっと納得し難いことが行われているのです。それに触れておきます。

「運」という字は三年の時習います。この字は「軍」を知らないことには書けません。ならば、その「軍」は三年以前で習い終わっているか、というに、「軍」は実は四年次の漢字なのです。因みに「揮」は六年の字です。つ

まり、既に書ける筈の漢字が、一年を経て、改めて教えられる、という仕組みです。実に勿体ない年次配当と申して過言でありますまい。

「院」は三年次の漢字。故に「完」は当然それ以前に配当される然るべきところ、四年になって習うのです。

同様な例。「館」を三年ですませて後、四年になって「官」という次第。

「習」に至っては、これを三年で教えておきながら、その一部をなす「羽」の如き、最も上級の六年生が習う単独の文字なのです。

「校」は一年で習っても「交」だと翌年を待たねばならず、この際「効」も教えたらよからうに、これは五年次。

もっと極端な例。「記」は二年、「配」「起」は三年、そして「紀」「包」は四年で学び終った後、「己」は更に一年おいて六年生になった時、重ねて単独の文字として学び直さねばなりません、二年から三年間連続して学び、十分に頭へ叩き込んだ筈の「己」を。

輪廻の里を離れる

村瀬秀雄



「はなれがたき輪廻の里をはなれて」

われ等は生死を繰り返しながら二つの世界を巡ってきたが、これは車輪が止まらずに廻り続けているようであるから輪廻という。六つの世界は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人界、天界のことである。地獄は地下深い所にあって、火焰に包まれながら逆さに落ち続け、二千年たっても到達しないという。地獄に落ち

た者には自由が全くなく、あるものは強制された苦痛だけである。あらゆる責苦によって言語に絶する激苦を受ける。いかに焼かれても裂かれても死ぬことができないために、休むことのない責苦を繰り返して受けなければならぬ。人壽三十六億歳が阿毘地獄の一日一夜に当る。その命は二万歳である。一つの地獄での命を終えたと、また次の地獄に移って行った際限がない。

餓鬼は足ることを知らない貪りの世界である。姿こそ見えないが、この世の至る所に住んでいるという。もし姿を見ることができれば目は円く大きく、口は鳥のように鋭く、腹はまりのように大きく脹らみ、手足は針金のように細く瘦せている。それというのも常に餌を漁り求めているために目が大きく、何んでも貪り食べるために口が尖り、それでいて少しも身につかないから手足は瘦せ細り、腹ばかり大きくても常に飢えて訴えている。畜生は本能だけで行動している世界である。鞭で打たれて酷使されても、あるいは愛玩されていても平気である。ただ本能の命ずるままに睡り食べることを欲するだけである。修羅は闘争の世界である。常に疑い、嫉妬し、争ってやむことがない。一部は地獄や畜生の世界に住んでいるが、何れも相手を負かすことを目的とし、生き甲斐としている。

人界には善と惡とが共存し、人々は善と惡との間を往復しながら生きている。中には自

由を持たずに強制される毎日を送っている者があり、己れ独り貪ってやまない者があり、本能に支配されて暮している者があり、闘争を好んで争いを止めない者がいる。何れにしても煩惱が盛んで自ら苦しみ、他を傷つけている。天界は勝れた楽しみがある世界である。しかし苦しみも免れない。死期が近づくと身体が急速に衰え、楽しみが大きかっただけに執着心が強く、その苦しみは地獄の苦しみよりも大きいという。この六つの世界の何れに生れるかは善因善果と惡因惡果によって自然に赴き、次々に巡り歩いてやむことがない。經典は次のように説く。

「善人は善を行つたことによって今世の樂所から來世の樂所に生れ、今世の明るみから來世の明るみに生れる。惡人は惡を行つたことによって今世の苦しみから來世の苦しみに生れ、今世の冥闇から來世の冥闇に生れる。この道理によって生れる所は誰も知ることができないが、ただ独り仏のみが知り給うところ

である」(無量寿經)

そしてまた次のように説く。

「人々は日常の愛欲生活に憂き身をやつし、来世のことを少しも考えようとしな。人々はこの世に独りで生れてきたが、死る時も独りである。この世を独りで去って、来世には独りでゆく。生前の善惡の行いに従って、来世では苦樂の何れかを受ける世界に生れ替ってゆく。そこでは生前の善惡の報いに応じた苦樂を独りで受けるのであって、誰も代ってくる者がない」(同上)

われ等は受け難い人身を受けているのである。今日をこそ大切にして暮さなくてはならない。經典は更に次のように説く。

「人々は健康な今日においてこそ、努力すれば何んなりと行うことができる筈である。それにも拘らず俗事をすてて、努めて善を修めようとしな。何故であろうか。何故に精進して苦の世界から抜け出すことを願わないのであるか。もし浄土に往生することがで

きれば、そこにおいては永遠の生命が得られるというのに、どうして道を求めようとしないのであるか。漫然とその日その日を暮しているだけで、やがて迫り来る老いと死とが待っているのである。何も期待すべきものがないというのに、日々の生活や老後にどのような楽しみがあるというのであろうか」(同上)

この世は四苦八苦の世界である。四苦は生老病死であり、八苦は四苦に愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五陰盛苦の四つを加えたものである。その内の何れもが誰でも避けることができないというのがこの世なのである。もしこの苦から離れたいと願うならば、悟りの境地である極樂浄土に往生するしか道がない。經典は次のように説く。

「人々は自ら努めて修行して悟りを求め、相互に救済しあわなくてはならない。清い心によつて求めて善を行い、功德を積み重ねてゆくなればこの世の苦しみは僅かな間のことで

ある。後世において阿弥陀仏の浄土に往生できれば、極まりない快樂を受けることができる。浄土では常に仏の教えに合致した修行ができて生死の苦しみがなくなり、貪り怒り愚かさによ、て生ずる苦悩がなくなり、憂いもなくなる。もし浄土に長くいたいと思うならば、願いの通りにいか程でも長くいることができる。浄土における悟りの世界は絶対自由な境地であつて、涅槃の境地に次ぐものである」(同上)

輪廻の里から離れたいと願うならば、念仏を唱えて極楽往生すれば直ちに離れて再び戻ることがない。經典は次のように説く。

「極楽浄土は微妙なところであり、安樂なところであり、清浄なところである。それにも拘らず汝等はどうして念仏を唱えて往生することをお願いなのか。念仏を唱えれば必ず浄土に往生できるということは自然の道理なのである。念仏往生の道は身分の上下によって差別されることがなく、誰でもすべて願いを

果すことができる。人々は自ら進んで努力精進し、念仏を唱えて浄土に往生する道を求めなくてはならない。念仏を唱えて極楽浄土に往生できれば地獄、餓鬼、畜生、人界、天界という五つの迷いの世界に結びつく絆を一時に断ち切ることができる。浄土に往生することによって悪世界に通ずる道は自然に閉ざされ、成仏への道を進んでどこまでも究め尽すことができる。極楽往生できる道はまことにたやすい道である。それにも拘らず往生する人は極めて少ない。浄土に往生しようとする者に何ものも逆うものがなく、違えることがらく自然に浄土に迎え入れられるのである。人々はどうして世間の雑事にばかり迫られて暮し、来世往生の道を勤め行うことをしないのであろうか。人々はどういうつけで。念仏を唱える功德を求めようとしないのであろうか」(同上)

念仏を唱えれば仏の本願力に乗じて往生できるので、往生はたしかにたやすい道なので

ある。法然上人は次のようにいった。

「男でも女でも同じことであり、身分の貴賤を選ぶことなく、善人でも悪人でも区別することなく、心から念仏を唱えていれば一人も洩れることなく往生できる。たとえば重い石を船に乗せて運べば沈むことなく、万里の海を渡るようなものである。罪業が石のように重い者であっても、念仏を唱えて本願の船に乗ることができれば、生死の世界という苦海を渡るのに沈むことなく必ず極楽浄土に往生できる。わが身の罪業が重いからといって、本願の不思議な力を疑うようなことはゆめゆめあってはならない。このようにわが身の本願に任せて往生したいと願えば必ず往生できるのであって、これを他力の往生というのである」(十二箇条問答)

極楽往生すれば直ちに迷いの世界から離れられるのは仏の御力によってできるのであって、己れの修行の功德によってではない。もし今生で念仏往生の法門にあわなかったなら

ば、これからも未来永劫にわたって迷いの世界から離れずに輪廻の旅を続けることになった筈である。われ等ごときの凡夫であっても念仏を唱えていれば、仏の御力によって往生できて輪廻の里から離れることができる。証賢は次のようにいった。

「仏の本願は漁師が海に垂れている釣竿と同じことである。そして念仏は釣竿につけてある餌に当る。人々が南無阿弥陀仏と唱えるのは、魚が餌を吞み込んだのに外ならない。つまり十劫という昔から阿弥陀仏という大慈悲の漁師がいて、念仏往生という釣竿を垂れ給うていたのである。念仏という餌を吞み込んだ者は、生死の世界という深い海底から救い上げられることを疑ってはならない。目の前にある餌をみて吞み込まない魚がいるわけがない。釣竿の餌が念仏であるから、念仏を唱えれば仏という漁師に釣り上げられて、誰でも直ちに往生できるわけである。餌を求めて釣針を吞むまでは僅かながら魚の仕業なので

ある。釣竿を垂れて魚を釣り上げるのは、すべて漁師の力である。往生を願うて念仏を唱えるまでは、僅かでも人の仕業である。本願を成就して人々を極楽浄土に導き給うのは、ことごとく仏の御力によるものである。極楽浄土に往生したいと願うのでなければ、われ等凡夫はどの仏の国に往生できるというのであろうか。何事にも最後ということがある。このたびこそ迷いの世界を巡る最後であり、往生すれば再び迷いの世界に戻ることがない」(帰命本願鈔)

建永二年(一二〇七)二月十六日に京を発った法然上人遠流の一行は南に下って下鳥羽につき、そこで川船に乗った。やがて播磨の国(兵庫県西南部)高砂の浦についたが、そこでも多くの人々が仏縁を結んだ。その中に七十歳余りの老翁と六十歳余りの老婦がいて上人にいった。

「私たちはこの浦に住む漁師です。幼い頃から漁を仕事とし、朝に夕に魚の命を奪って世

渡りをしてきました。生物を殺す者は地獄におちて堪え難い苦しみを受けると聞いていますが、どのようにしたなら、その苦しみから免れることができましょうか。どうかお助け下さい」

老夫婦は手を合せ、泣いて訴えた。上人は哀れに思い、そのように殺生を業とする者でも南無阿弥陀仏と唱えれば、仏の慈悲の本願に乗じて必ず極楽浄土に往生できるということとを懇ろに教えた。すると老夫婦は二人共に涙に咽んで喜んだ。その後の漁師は魚をとるにも口に念仏を唱えていた。夜は家に帰ってから遅くまで二人声を合せて念仏を唱えていた。やがて寿命が尽きて臨終を迎えた時には少しも心を乱すことなく往生をとげた。この話を伝え聞いた上人はいった。

「人々の素質と環境は千差万別であるが、あの時の漁師は念仏を唱えれば極楽往生できることを現に許明してくれた人であった」(勅

修御伝第三十四)

(つづく)

み仏とともに

=17=

—貴光寺建立—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

昭和三十一年八月十五日、父は忽然とこの世から去っていった。その前の晩、妻が突然、

「田舎の父さんは、元気でしようね」

と思い出したように話した。別に便りもないから元氣に
いるのだらうなどと、夫婦で話し合っていた。ところが
その翌朝、まだ薄暗い頃、バイクのけたたましい音がし
て、父危篤の電報が寄せられた。後で語ったことだが、

「きつと父さんが、幡随院に別れをつけにきたので、
君が父の話題を出したに違いない」

と、不思議なできごとに、今更のように感を深くした。
よく世間でも、それに類した話を聞くが、妻が父の話を
出したのは、父が孫の顔みたさに、幡随院を訪れたに違
いないと今も思っている。そして、何故早く、子供を連
れて、田舎に行かなかったのかと、後悔もしている。

二通目の「父死す」の電報が、それから間もなくきた。
急ぎ田舎に帰った。しかし父は病気で死んだのではな



—貴 光 寺—

った。自から命を絶って、お浄土に行ったのであった。田舎のお盆は八月の盆で、十五日のお盆法要があり、その夕方はお精霊さんしょうらいを川に送る日であった。父は一切の盆行事を終り、身の廻りをかたづけ、着物をきかえ、ご先祖の浄土へのお帰りと一緒に、鉄道に身を投げて、浄土に行ったのであった。一部始終を兄から聞きながら、それまでの父の考えを私は知っていたので、動揺はしなかった。そして私は本当に父は自から浄土に帰ったのだと信じた。そして、今でも信じている。父には父なりの考えがあったのである。何故父が、自から命を絶つまで、お浄土行きをしたかということについては、この小伝が終る最後にまとめたいと考えているので、父の死については、ここではこれだけに止めておきたい。

念仏信仰に厚かった母も、父のお浄土行きを信じていたのか、大した動揺もしなかった。そして母は、父の為に完全な精進生活に入り、父の冥福を祈った。母の精進生活というのは、朝夕のねんごろな読経はいうまでもないが、それより私を感動させたのは、一切の「なまぐさ」を生活の中から絶ったことであった。自分の食べるものは別な鍋で煮て、一切なまぐさを口にしなかった。だし

に使う小魚などを用いなかったばかりでなく、ねぎなども口にしなかった。仏教の教えにしたがって精進潔斎した。それは頭の下る思いであった。母の信仰の強さと、意志の強さを私は改めてみた。それは一年程続いた。

○

幡随院生活は、時の経過と共に、いろいろの問題があった。しかし、私にとって一番苦痛であったことは、研究する時間が少ないことであった。止むを得ず、学校に居る時間を多くして、これを研究の時間に当てた。こうした行動は、神林師には気に入らなかったようである。寺の経営方法についても、二人の意見は必ずしも合わなかった。こうしたことが積み重なって、昭和三十四年十一月三十日を以て、幡随院を辞任した。

私の不徳ということであるが、神林師と行を共にすることは、仲々難しかった。そして神林師はこれを機会に幡随院を浄土宗から離れて単立とし、おまけに住職を代表役員とせず、檀家総代を代表役員とする新しい宗教法人を設立した。幡随院を独自の在り方にし、近代化したのだと言っておられたが、その可否は歴史が判定を下すことであらう。

結局するところ、幡随院生活は五年で終止符を打ち、再び私は在家生活に入った。一時は守中裕幸師の好意で府中の徳寿院の留守番をさせて頂いたが、これも昭和四十一年に終り、現在の日野の地に新居を構えた。

それより少し前、昭和三十九年、鎌倉大仏殿の佐藤密雄先生が大正大学々長になられた機会に、学生課長として大正大学に帰ってこないかというお誘いがあった。その話を持ってきて頂いたのが佐藤良智先生であった。大正大学には、その頃「三佐藤」といって、三人の佐藤先生が、大学の重要ポストにあって、活躍しておられた。佐藤賢順先生がそのもう一人である。佐藤密雄先生は、仏教専門学校時代からの恩師である。良智先生は、大正大学の学生時代、仏教大学からきた十三人（顕浄会という会を作っていた）が大変お世話になった関係から、終戦後も私は何かとお世話になっていた。

東京教育大学に助手をしていた私であったが、切角母校からお呼びがあったことは人生のチャンスと決断し、思いきって佐藤両先生のお誘いを引き受けた。今日の大正大学における私があるのは、実はこうした恩師の厚いご加護があつたのであった。そして私が、日野に新

居を構えることができたのも、教育大学の退職金があったからでもあった。有り難いめぐりあわせに、私の新しい人生は大正大学を中心として発進することになった。

○

私は、幾変遷をして、世の荒波を越えてきた。そして私を取り巻く多くのみ仏たちの力によって、幸いなことに、私なりな人生を歩かせて頂いている。それはそれなりに満足しているのであるが、ただ一つ心残りがあった。それは、両親が寺に入って欲しいという願望を満していないことである。確かに幡随院に五年間住職はしていたが、これはこと志に反して、五年で終ってしまった。そして、終に、改めて寺に入る機会を持っていな。い。勿論、父は幡随院時代に死んだのでそれなりに満足していたかも知れない。そんな悩みの時、寺を建立する機会を与えて下さったみ仏がいた。それは弁護士のか萩原貴光夫妻であった。

萩原貴光氏の住宅は、豊島区の東長崎にあり、栗本俊道師が世話しておられた大乘学寮の近くにあった。そこ一人娘である純子さんが、大乘学寮の日曜学校に通うことが機縁となって、大乘学寮生が、萩原宅に出入りす

るようになった。大乘学寮は殆んど大正大学の学生であったため、多くの学生が、萩原家に入出入りした。

夫妻は心の広い方で、これらの学生を受け入れ、飯を食わせ、酒を飲ませ、一家同様の生活であつたらしい。

その中に、私の親友である真野龍海君もいた。二人は仏専時代からの学友で、顕浄会同人であり、そして、二人とも大正大学に残り、教授としての職を奉じている生涯の親友である。この真野君の紹介で、戦後私は萩原家に入出入りした。

父母の情に飢えていた私は、この萩原夫妻に父母の情を求めた。萩原夫妻も吾が子の様に可愛がって下さった。当初、萩原家の近くにいた真野君の下宿に入れてもらった関係もあり、頻繁に入出入りした。その後、居所を変えても、月に何回か出掛け、泊りもした。暮の好きな先生を相手にして戦ってみたり、酒を飲み、歌を歌って楽しい一夜を明したことは、数え切れない。月に一度、親しい者が、多い時は二十人程も集り、宴会をした。その夜はどんちゃん騒ぎで、歌い踊り、あげくの果ては、さこ寝で一夜を明した。

しかし、人生はままたらぬもの。昭和四十三年七月十



——萩原夫妻——

一日、先生が忽然とこの世を去られた。机で書き物をしておられ、そのまま息を引きとられたのであった。丁度私はその時、岐阜の明治村にいた。アナウンスの呼び出しで、急遽帰京したのであるから、全くの突然のできごとであった。われわれ世話になった者が全国から集り、松濤誠廉先生を導師として、盛大な葬儀を自宅でした。全国から集ってきた人びとは、殆んど坊さんであったから、部屋中が坊さんになったわけである。先生もこれには満足して下さったことと思う。

そんなこともあって、萩原夫人から先生の追善の為と、いうことで、相当の寄附金を私は頂いた。兼ねて私が、拙宅に念仏堂を建てたいと言っていたからである。そんなことを大学の先輩や友人達にも話したところ、「われわれも寄附してやろう」ということになり、四疊半程のお堂であるが、昭和四十五年の三月、この堂ができた。私は萩原先生の名を頂いて「貴光寺」と名付けた。

そんなことをまた当時の門主の岸信宏貌下は申し上げたところ、貌下から「貴光寺」という横書きのご染筆を頂き、今もこれは小さな堂に不釣り合いではあるが、大きな額が燦然と輝いてかかっている。

(つづく)

◎『浄土』表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』八月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

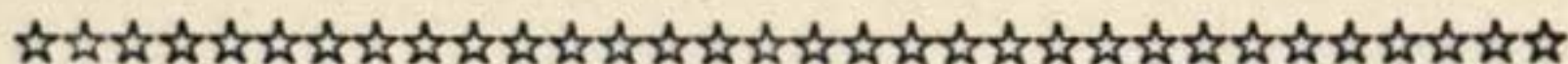
好評の『浄土』誌表紙版画絵は、本年の正月号より、松浦春子先生の清楚な作品を頂戴しております。今回も、松浦先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただきます。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林治郎先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七



立ち止まるな善導

〈26〉

寺内大吉

挿絵・松濤達文

女の戦場

十

若い魏国夫人の横死を、中国の近代作家林語堂は以下のように断定している。やや長文になるが小沼丹沢の「則天武后」から引用しておく。

その夜、若い夫人（魏国）は世を去っ

た。美しい若い女性を、その青春の盛りに散らしてしまおうとは、なんと気まぐれで、なんと毒々しい嫉妬心であろうか！ また皇帝（高宗）自身、なんと無策だったことであろうか！ 皇帝は悲嘆にくれた。その娘こそは、彼の唯一つの慰めであり欲びだったのである。武氏（則天武后）は封禅から戻ったというのに、その心は黒豹も同様、全然浄化されていな



い。武氏はもう若くない。すでに更年期を過ぎている。が、その精力は一向に衰えていない。とはいえ黒豹と寝台を共にするという考えは、孤独で傷ついた君主にとって何やらやりきれぬ気のするものであった。

二人の兄弟も（惟良と懷運）恐怖におののいた。祖母（叔母？）が眼に涙を浮かべてこう言ったからである。

「可愛想に、私の姪が。あの母親（韓国夫人）は私のただひとりの肉親の姉だったのに。こんどはあの子まで取り上げられてしまった。ほんとに、この人殺したちは……」と叔母は腹立ちまぎれに叫んだ。「この二人ときたら、陛下に毒を盛ろうとしたのです。それを、あの子がうつかり口に入れて……可愛想に」

こうなると、これは一見したところ明白な犯罪であって、武氏は目撃者ということになる。もっとも煎茶が運ばれて食

卓に供されるまでの時間、並びにその間、煎茶に手を触れた人間について綿密に調査すれば、なんらかの手がかりが得られるかもしれぬ。が、説明に厄介なのは、その同じものを口にした他の人間——武氏と二人の兄弟は何でもなかったという点である。そこで、こういうことが考えられる。つまり、怖るべき毒の入った煎茶は一つしかなかったのである。したがって重要な問題は、煎茶をただ運んでくるだけではなくて、肝腎なやつを当の相手に配ることではなければならぬ。この二人の被告（惟良と懷運）は、いったいどうして肝腎なやつが夫人に配られると確信できたのだろうか。

林語堂も則天武后に「影の補助員」が存在したことをほのめかしている。韓国夫人の場合と同じで、猫がこの毒皿を運んだことであろう。「李猫」の李義府である。そして惟良

れ王皇后に引き取られた李忠だった。その義母も刑死した現在生きる希望はなく、自殺説が最も現実感が深い。

こう書いてくると則天武后が犯したとする殺人罪はどれも成立しない。言ってみれば「女の戦場」における偶発的な遭遇戦ということになる。

だが、韓国と魏国の両夫人の場合は異なる。弁明の余地はない。血を分けた骨肉だった。武氏一族で高宗皇帝の閨房を独占したさなかで、則天武后は味方の将領を叛乱の名目を押つけて謀殺したのである。しかもその処刑に李義府や甥たちの手を借り、彼らをも抹消した。

誰に弁明する必要もないわけだが、彼女の胸は傷ついた。夜ごとの夢寝で責め立てられた。見かけるだけで鳥肌が立つネズミの大群が夢の画面へ押し寄せてくるのである。とりわけ若く美しい姪の幻影は則天武后の神経をずたずたにした。

その乾封元号が明けて翌年も深まると、高宗は長安城へ帰還した。功臣である貞武公李勣の病状が重いという報告に接したからである。

李勣は剛直な軍人で、すでに先代太宗の在世中から数々の武勲をあげた。宮廷の政治に深くかかわらなかったことが李勣に生涯を全うさせた。ことに高宗が則天武后を皇后位へ押し上げようとした折、長孫無忌や褚遂良の元老たちはこぞって異をとなえた。李勣も意見を求められたが、

「誰を正妻にするかは夫の自由です。これは天子でも同じはず。陛下が良いと思ったら、おきめになったらよろしい」

磊落に言っただけだ。武人らしい粗策な発言だったが、なまじいの政治色で染まっていないだけに、この言葉は生きた。則天武后は数少い支持者を得た思いで、李勣にはいつも一目を置かねばならなかった。長安城へ帰るのは気が進まなかったが、李勣危篤とあれば

太子(高宗)昼夜、側を離れず。或は累日、食わず。髪、白きに変ずる者あり。上、泣きて曰く「汝、よく孝愛すること、かくの如し。吾れ死すとも何ぞ恨みん」と。丁卯、病い篤し。長孫無忌を召して含風殿に入る。上、臥して手を引き、無忌の頤(おとがい)を捫(な)づ。無忌、哭悲して自ら勝(た)えず。上、ついに言うところあるを得ず。よって無忌をして出でしむ。

——己巳、また無忌及び褚遂良を召し、臥内に入れ、これに謂って曰く「朕いま悉く後事を以て公が輩(ともがら)に付す。太子の仁孝なるは公が輩の知るところなり。よくこれを輔導せよ」と。太子に謂って曰く「無忌、遂良あり。汝、天下を憂うるなかれ」と。また遂良に謂って曰く「無忌、忠を吾れに尽す。吾れ天下をたもつはその力多きなり。吾れ死すとも讒人(さんじん)をしてこれを間(かん)せしむるなかれ」と。なお遂良をして遺詔を草せしむ。

——しばらくありて上、崩ず(行年五十三)。太子、無忌の頸を擁し、号慟してまさに絶えんとす。無忌、涕(なみだ)をとり、衆事を処分し、以て内外を安んぜんと請う。太子、哀号することやまず、無忌曰く「主上、宗廟社稷を以て殿下に付す。あに匹夫にならうて唯だ哭泣するを得んや」と。すなわち秘して喪を発せず。

太宗死の前後の様子を伝えている。この文章でも明らかなように病弱で、心気も脆ろかった若き皇太子(高宗)は父王の死で強烈なショックを受けた。「太子、無忌の頸を擁し、号慟してまさに絶えんとす」——亡き母の兄にあたる長孫無忌にかじりつき、泣きむせんでまさに失神しそうであったという。

このようなショックから、高宗はどのようなにして、誰の助けをかりて立ち直ったのであろうか。

「ここに先帝は横たわっていらっしやいました」

則天武后は、訪ねてきた善導と憚良を含風殿へ招じ入れると、いきなり奥まった広間へ連れていった。がらんとした調度類一つない空き部屋であった。そこが太宗終焉の場所だったので、誰にも使用させなかったのである。

喪は発しなかったが、きわめて内輪の人間によって遺骸は守られ、二日二晩にわたって通夜が営まれたという。

「それがどうでしょう。二晩目になると、皇妃や皇子たちはもちろん、大臣諸卿も誰ひとりこの部屋から姿を消してしまいました。先帝の御遺言で、お世継ぎが治太子と決定したものですから、各自めいめいの思惑で動き出したのです」

全員が遺骸をほったらかしにして、自己保身のために奔走しはじめたという。

「……」

善導は黙然と立ちつくしたまま則天武后の話に耳を傾けている。

「詰めていたのは治太子と私だけでした」

当時を思い出したのか。武后の語気には情量が加わってきた。

「……」

相変らず善導は一語も発しない。

「太子は私に取りすがって来られました。私は決心したのです。このお方を守ってあげなければいけない。一生守ってあげなければいけないと」

諒闇の葬室で高宗と武后は結ばれたというのである。いかに高宗が身も世もなく嘆き悲しんでいたとは言え、そんな太子を慰めるといふ弁明があったとは言え、夫の柩を眼前にして密通するとは余りにも不謹慎ではないか。

もっとも二人の仲を不義密通と呼ぶのは適切でなかったかもしれない。武才人が後宮入りをした相手は、当初皇太子の治だったはず

だからである。男十三、女十四歳、この仲を引き裂いたのは父王の太宗だった。武后を奪って自己の側妾とした。だからお互いに罪の意識は薄かったと、則天武后は、いま告白する。

「私の陛下への愛情には一点の濁りもございませんでした。その証固に、私は先帝の喪が発せられると、そのまま剃髪して感業尼院へ入りました。先帝の菩提と太子の至福とを生涯お祈りするつもりだったのです」

「……」

「でも感業尼院へおいでになった陛下は私に旧交をお求めになりました。私も弱い女でした。陛下の熱いお情けに負けてしまったのです。しかも私は身ごもっていました」

武后が後宮入りを果たし、皇后の地位に登りつめるまでの経緯を要領よく手短かに物語った。

「私の陛下への愛情は、この部屋で結ばれたときといささかも違ってはいないのですが、

宮廷というところは愛情だけでは生きてゆけない世界なのです。ひとたび陛下の寵を失えば、それは死を意味します。いいえ、愛寵があったとしても弱い者は殺されてしまうのです」

その点は憚良にも理解できた。この伯母のえげつないやり口に何度も眉をひそめたものだが、少年なりの分別でそれがきびしい生存競争だったのだ、と自分に納得させた記憶がある。伯母だけではない。前皇后や蕭淑妃との戦いにおくれをとれば、一族すべての者が殺されてしまうであろう。

「王舎城です」

ようやく善導が口をひらいた。

「王舎城……」

「マガダ国の国王がいた城です。国王とその夫人の韋提希は、わが子阿闍世のために苦しみ抜きました。もとはと言えば、国王夫婦はその昔、阿闍世太子を殺そうとしたことがあったからです」

「……」

則天武后はじっと耳を傾ける。

「それもこれも王家があるがためです。巨大な富と権力を掌中にしています。それを失いたくはない。わが子に相続させて、自分たちの存在を永遠に残しておきたいばかりに矛盾の種をまき散らしたのです」

「矛盾の種ですか」

「相続する権力や富がなければ、そんな悲劇はおこらなかったでしょう。皇后、あなたたちも同じなのです」

「あなたたちとおっしゃると？」

「皇帝陛下も一緒ですよ」

善導はもの静かな口調で、しかし決然と言いつ切った。

「和上は、皇帝陛下までも……」

武後の語気が激昂で乱れる。

「そうです。陛下もあなたと同じ愚かな悪人にすぎません」

「陛下が悪人ですって」

憚良も背筋に冷たいものを感じた。

そんなことを口にしてもいいのであろうか。善導和上の一身に危険は及ばないであろうか。



国王、王后といえどもただの人間にすぎぬ、と善導は言い切るのである。その実証を「観無量寿経」の注釈で明言している。

経文にこんな文章がある。

——仏、韋提希(皇后)に告げ給わく。「汝はこれ凡夫にして心想羸劣なり。いまだ天眼を得ざれば遠くを観ずること能わず。諸仏、如来は異の方便ありて、汝をして見ることを得せしめん」時に韋提希は仏に申してもうさく。「世尊、わが如きは今は仏力を以てのゆえに、かの国土を見たてまつる。もし仏滅後のもろもろの衆生らは濁世不善にして、五

諸学者によってしばしばおかされてきたものなのである。国王や皇后を特別扱いにする誤りである。

善導はここで明快に旧説を否定した。国王や皇后といえども街角にうろついている庶人と全く異なるところはない、と断じたのである。

学説としてはともかくもその王后を眼前において、ずばり言い切った善導に対して、憚良は驚きと恐れを感じないではいられなかった。

伯母の則天武后はただの女性ではない。誇り高き女、しかもいったん「敵」だときめつけると、あらゆる奸智をめぐらして抹殺せずにはおかない恐ろしい人である。

現にいまも自分や夫の高宗を愚人凡夫と罵られ、明らかに心を動揺させているではないか。伯母の権力を以てすれば、善導和上の首の一つや二つを斬り落すのは容易いことであった。

「和上、すこし言葉が過ぎるのではないでしようか」

則天武後の吐息が小刻みにはずんでいる。激昂しはじめたにちがいない。善導は顔色一つ変えないで言った。

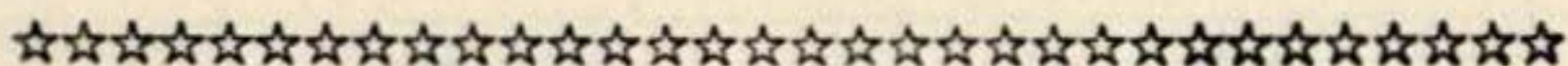
「愚人です。王后、あなたも凡夫です」

「和上は、すると御政道を非難なさるのですか」

「御政道を……いや、これは御政道とは何の関係もないことなのです。例えば、酒作りが美味な酒を調醸するようなものです。造られた酒自体をうんぬんしても意味はございません」

「御政道と酒造とは違うのではないでしようか」

「いや、同じです。その造った酒ではなくて、酒を離れた人間の心の問題なのです。立派な酒造りもいれば、愚人もいます。天子も同じで愚かな人もいれば、すぐれた王もいる、ということです」



崩
伏



舞見御中

埼玉工業大学

松川文豪

東山学園長

石井俊恭

鎌倉大仏殿 高德院

佐藤密雄

淑徳中学校長

淑徳高等学校長

里見達人

〒174 東京都板橋区前野町五一四一一

上宮学園

理事長・学園長 鵜飼隆玄

高等学校長 鵜飼光順

〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一六

大原山 西福寺

鵜飼隆玄

〒248 鎌倉市長谷四一二二八

鎮西学園理事長

鎮西高等学校長

真和中・高等学校長

上田祐規

〒862 熊本市九品寺三一一一一

神田寺（旧法禪寺・安良寺）

学校法人 真理学園・神田寺幼稚園

友松諦道

〒101 東京都千代田区外神田三一四一〇
電話（〇三）二五一八六八三〇五

萩市 常念寺

老隠 古本超然

学校法人 芝学園

理事長

豊岡益人

学校長

徳久鐵郎

法然上人降誕聖地

美作 誕生寺

岡山県久米郡久米南町

電話（〇八六七二）八一二二〇二

寺内大吉

舞見御中

遇斯庵主

谷地益雄

〒045 岩手県花巻市四日町一―一二一四七
廣隆寺内

お骨仏の寺 一心寺

貫主高口恭行

〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九
電話(〇六)七七二―〇三七二(代)

光心寺

北山良祐

晴雲寺住職

塚田弘導

〒254 平塚市立野町六―五

祐天寺住職

巖谷勝業

〒153 目黒区中目黒五―二四―五三

正雲寺

〒980 仙台市新寺五―八―三七

浄土宗鎮西流根元地

聖光寺

小林忍戒

大松寺

〒108 東京都港区三田四―一―三八

雲上寺住職

東海林良雲

〒985 塩釜市南町二―一―一

龍泉寺住職

瀧沢教夫

〒405 山梨市市川二―二五―一

光運寺住職

飯田信弘

〒510 四日市市中部三―一―二

舞見御中署

法然上人二十五霊場
第二番仏生山法然寺

細井俊明

伝通院住職

吉川哲雄

〒112 東京都文京区小石川三―一四―六

岩手教区教化団長

圓光寺住職

加藤順底

〒020 盛岡市南大通三―二一―四九

北川一有

長寿院

〒111 東京都台東区鳥越二―一三―一八

〒113 東京都文京区本郷一―八―三

昌清寺

住職 服部光順

電話(〇三)八一―一三三七二

檀王法林寺

だん王保育園・児童館

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

群馬教区長

野口善雄

〒376 桐生市本町六―三九八 浄運寺

西住院

戸川靈俊

〒606 京都市左京区黒谷町三〇

近龍寺住職

松濤弘道

〒328 栃木市万町二二―四

電話(〇二八二)二三―一〇八〇二

芳泉寺

柳^{なぎ}楽^ら真^{しん}純^{じゅん}

社会福祉法人 大慈会・かんぎおん

〒386 上田市常磐城三―七―四八

浄土宗教学局長

大田秀三

〒370 高崎市通町九〇 安国寺

慈光ビル(〇二七三)二三―一四〇〇〇

〒440 豊橋市関屋町二二二

悟真寺

住職 立松 辨成

電話(〇五三二)五二―五五六六

舞見御中

浄土宗宗議会議員

伊東 康雄

龍泉寺住職

本山光明寺執事長

西念寺住職

北邨 謙順

〒250-02 南足柄市沼田三一五

回向院住職

本多 清敏

〒130 東京都墨田区両国二一八一〇

稲田 稔界

おてらはみなさんのそうだんしよ
桜と観音さまのお寺

正念寺・是田寺

浄心寺

小池 政雄

称名寺住職

須藤 隆仙

〒040 函館市船見町一八一四

電話(〇二三八)二六一五二三五

中島 真哉

青山 梅窓院

〒107 東京都港区南青山二二二六―三八

教安寺住職

野呂 幸進

〒210 川崎市川崎区小川町六一二

電話(〇四四)二二二―四九四六

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六一一

清岸寺

原口 徳正

松庵寺内無為窟主

小川 金英

〒025 花巻市双葉町六一四

仏教福祉センターよるひる銀行

〒030 青森市本町一―一―一二

正覚寺住職

楠美 知行

法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進に努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十二巻 八月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十一年七月二十五日 印刷

昭和六十一年八月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷所 長谷川印刷

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒二三 振替東京八一八二一八七番

舞見御中

總本山 知恩院 門主 藤井実応	大本山 増上寺 法王 中村康隆	大本山 金戒光明寺 法主 稻岡覚順	大本山 百万遍知恩寺 法主 林 靈 法
大本山 清浄華院 法主 江藤澄賢	大本山 善導寺 法主 金子貫達	大本山 光明寺 法主 藤吉慈海	大本山 善光寺大本願 法主 一条智光
〒170 東京都豊島区西巢鴨三―二〇―一 大正大学 電話(〇三)九一八―七三一―代表	〒603 京都市北区紫野北花ノ坊町九六 佛教大学 電話(〇七五)四九一―一二四―代表 通信教育部 四九一―〇二三九	学校法人 大乘淑徳学園 淑徳短期大学 理事長 長谷川良昭 〒174 東京都板橋区前野町五―三―七	京都文教短期大学 学長大橋俊有 〒611 宇治市槇島町八〇